

## チマルパインと 1608 年

篠原 愛人

[要約]

16 世紀末にメキシコ盆地南東部のチャルコ地方で生を受けた先住民チマルパインは、14 歳からメキシコ市のサンアントニオ・アバー教会で下働きをしながら、万卷の書に親しむ機会を得た。その成果は『歴史報告書』(第一～第八)や『日記』(1577～1615 年)と称される同時代史である。本稿では『日記』の 1608 年の記事の最後に、前後と脈絡なく挿入された「史的回顧」の性質を考察した。

彼はそこで、天地創造以来のメキシコ先住民の歴史をキリスト教的普遍史の枠組みで振り返る。先住民の祖先が船でメキシコ北東部のアストラクに到達したのが西暦 50 年で、ユダヤ民族が離散する 20 年前だったとし、当時流布していた先住民のユダヤ起源説を否定する。先住民も神(キリスト)による救済に値するという主張である。また、自分たちの祖先が東方から来たこと、もともとは単一民族であったことも示唆している。

チマルパインのこのような歴史観は彼の他の著作でも見ることができる。彼の著作の参照関係を探るには、各書の執筆年を知る必要がある。彼の著作の執筆年については不明なものが多く、通説にも疑問がある。本稿では「史的回顧」が 1609 年に書かれたことを明らかにし、主に依拠した文献として『第七歴史報告書』とテソソモク作とされる『メシカヨトル年代記』を挙げた。通説では前者の執筆年は 1629 年、後者は 1609 年とされるが、本稿ではそれぞれ 1607 年、16 世紀後半の可能性も本稿で指摘した。

## はじめに

1521年8月、スペイン人エルナン・コルテスによってメキシコ中央部の、いわゆるアステカ王国<sup>①</sup>が征服された。それからほぼ半世紀を経た1573年には「発見・入植に関する基本法」<sup>②</sup>が制定され、武力による征服の時代は終わりを告げ、ヌエバ・エスパーニャと名前を変えたメキシコでいよいよ本格的な植民地の建設が始まろうとしていた。征服戦争やその後の植民地建設の過程でメキシコの先住民が絶滅した訳ではない。16世紀末でも先住民はまだ植民地人口の9割を占めていた。しかしそのほとんどは先スペイン期の暮らしを知らず、征服についても両親や祖父母から聞いて育った世代であった。いや、その祖父母も伝聞で知るだけで、征服を目撃していないことも少なくなかった。ところが16世紀の末になると、自分たちの歴史を記すべく筆を執る先住民エリートが出始める。スペイン人との混血、メスティソの史家もいた。メシーカ王家の血を引くエルナンド・デ・アルバラード・デ・テソソモク<sup>③</sup>、テスココ王家の末裔フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショチトル<sup>④</sup>、クリストーバル・デル・カスティージョ<sup>⑤</sup>、ディエゴ・ムニョス・カマルゴ<sup>⑥</sup>等々。チマルパインもそのような1人であった。

<sup>①</sup> 日本ではアステカ *azteca* の名のほうが知られているが、本稿では以下、メシーカ *mexica* と呼ぶ。守護神ウィツィロポチトリのお告げに従って故地アストランを出て、理想の住処を探す巡歴に出た彼らは、その途上でやはり守護神のお告げにより名前をメシーカと変えた。18世紀末になるまで、アステカ（「アストランの人たち」の意）という語はほとんど使われていない。植民地時代にメキシコ中央部の先住民は「メキシコ人 *mexicanos*」と呼ばれていた。

<sup>②</sup> 染田秀藤・篠原愛人監修『ラテンアメリカの歴史 史料から読み解く植民地時代』、p.99

<sup>③</sup> テソソモク（1537?～1609?）は、コルテスを都に迎え入れたメシーカ王モテクソマ2世（在位1502～20）の孫。スペイン語で『メシーカ年代記 *Crónica mexicana*』、ナワトル語で『メシカヨトル年代記 *Crónica mexicayotl*』を著わしたとされる。これらについては後の§3を参照のこと。

<sup>④</sup> イシュトリルショチトル（1578～1650）はメシーカ王国の主要都市国家テスココの王家の血を引くメスティソで、『ヌエバ・エスパーニャ史要約 *Sumaria relación de la Historia General desta Nueva España*』や『チチメカ民族の歴史 *Historia de la nación chichimeca*』をスペイン語で著わした。

<sup>⑤</sup> メスティソと思われるこの著述家（?～1604?）は16世紀末にナワトル語で2つの作品（『メシーカ人やその他の民族の到来史 *Historia de la venida de los mexicanos y otros pueblos*』、『征服の歴史 *Historia de la conquista*』）を記したが、断片しか現存しない。

<sup>⑥</sup> カマルゴ（1528～1600）はトラスカラ出身のメスティソで、『トラスカラ市と同地方の報告 *Descripción de la ciudad y provincia de Tlaxcala*』などを残した。

先住民史家の多くは旧支配者層の血筋で、それまで維持していた特権的な地位に危機が迫りつつあると感じ、自分たちの立場を改善・強化するために歴史を書いたと言われてきた<sup>7)</sup>。そのため彼らの作品は自分の一族やその支配していた都市国家の歴史に止まる傾向が強い、とも。しかし、チマルパインは故郷からも、俗世からも半歩ほど離れたところに身を置き、他とは違う視点から数々の『歴史報告書 *Relaciones históricas*』(以下、歴史報告と略記)や『日記 *Diario*』を残した。本稿では『日記』を考察の対象とするが、この題名は後世の誰かが付けたものであり、日々の出来事を記録した一般的な日記ではない。実際の内容は 1577 年から 1615 年までを扱った同時代史であるが、ここでは便宜的に『日記』と呼ぶことにする。

さて、その『日記』の中に他とは趣の異なる箇所がある。それはチマルパインが自分たち先住民の歴史を振り返った箇所、その部分を本稿では「史的回顧」と呼ぶ。「史的回顧」は前後と何の脈絡もなく、唐突に始まる。そのきっかけを示唆するものもなく、天地創造から 1608 年までの先住民の歴史を 43 ページにもわたって書き綴る。そして「史的回顧」の後も『日記』は続いてゆく。この「史的回顧」をなぜ 1608 年の段階で書いたのか、どのような意図があったのかという謎に切り込む第一歩として、本稿では「史的回顧」の性格の把握に努める。紙幅の関係で今回は取り上げることができなかったが、1608 年を境に『日記』にどのような変化が見られるかについても近いうちに取り上げたい。

## § 1 チマルパインの人となりと時代

ドミンゴ・フランシスコ・デ・サン・アントン・ムニオン・チマルパイン・クワウトレワニツィン<sup>8)</sup>は、1579 年 5 月 26 日、火曜日の夜半にメキシコ中央部のチャルコ地方で生を受けた。父フワン・アグスティン・イシュピツィン、母マリア・ヘロニマ・シウトスツィンはともに生粋の先住民であったが、両親だけでなく、祖父母とも生まれた時にはすでにメキシコはスペ

<sup>7)</sup> 例えば、Romero Galván “Fernando de Alva Ixtlilxóchitl” 特に p.351-53。もちろん先祖代々の歴史の記憶を保持し、若い世代に伝えるという目的もあったことはチマルパインも言明している (例えば『第八』、p.273 ほか)。

<sup>8)</sup> 本人もあれこれ省略形を使うことも多いが、本稿ではチマルパインと呼ぶ。フルネームは Domingo Francisco de San Antón Muñón Chimalpáhin Quauhtelhuantzin で、サン・アントンやムニオンは世話になった修道院やその関係者にあやかっただけである。綴りについては páhin の h を入れるべきでないという意見もある。

インに征服された後であり、チマルパインも自分の生まれた国を何の躊躇いもなくヌエバ・エスパーニャと呼んでいた<sup>(9)</sup>。

チマルパインの祖先は、テナンコ（現テナンゴ）という都市の礎を築いた首長クワウィツァツィンで、チマルパインは数えて9代目の子孫に当たる<sup>(10)</sup>。テナンコはトラルマナルコ、アマケメカ（現アメカメカ）、チマルワカンと並び、植民地時代においてもチャルコ地方の中心都市の1つであった。

チャルコ地方は標高2,000メートルを超すメキシコ盆地の南東部に位置し、チャルコ湖の東岸にある。チャルコ湖はチナンパ農耕で有名なショチミルコ湖、その北のテスココ湖などとも繋がっていた。また東にはネバダ山地が南北に、南にはアフスコ山地が東西方向に走っているほか、万年雪をかぶったポポカテペトル山とイスタシワトル山が東南部に聳えている（図1）。森林資源が豊かなため、先スペイン期にも植民地時代にもチャルコ地方は木材供給地として重宝された。

15世紀半ば、テノチティトランを都とするメシーカ人との20年に及ぶ戦争に敗れ、チャルコ地方はメシーカの支配下に入った<sup>(11)</sup>。1519年、メシーカ征服を目指すエルナン・コルテスが来た時、チャルコ地方の有力領主層の対応は割れたが、スペイン支持の旗幟を鮮明にした傍系一族の兄弟がテノチティトラン征服後の領主権をコルテスから安堵された<sup>(12)</sup>。その領主兄弟の間で1530年代半ばにもめ事が起こった際には、副王が派遣した判事によって植民地体制の中で解決が図られた<sup>(13)</sup>。

植民地時代はどこでもそうであったように、チャルコでも疫病頻発の影響もあって、先住民人口は減少の一途をたどった<sup>(14)</sup>。また建築ラッシュの続くメキシコ市に近い木材の提供を求められ、さらにメキシコ市の水害対策として建設がすすめられた排水路の工事にもチャルコ住民はしばしば駆り出された。17世紀初頭にはテナンコも田舎町の1つに後退してしまい、チマ

<sup>(9)</sup> 『簡潔な報告』p.175、『第三』p.275、『日記』p.165など。México（メヒコ、メシコ）と言えばテノチティトランを、そして植民地時代にはメキシコ市を指した。メヒコが国を指すようになるのはずいぶん後のことになる。以下、書名の略記については§3を参照のこと。なお、特になにも記さない場合、ページ数はRafael Tena版のページを記す。

<sup>(10)</sup> 『第七』p.249～251

<sup>(11)</sup> 『第三』p.253～

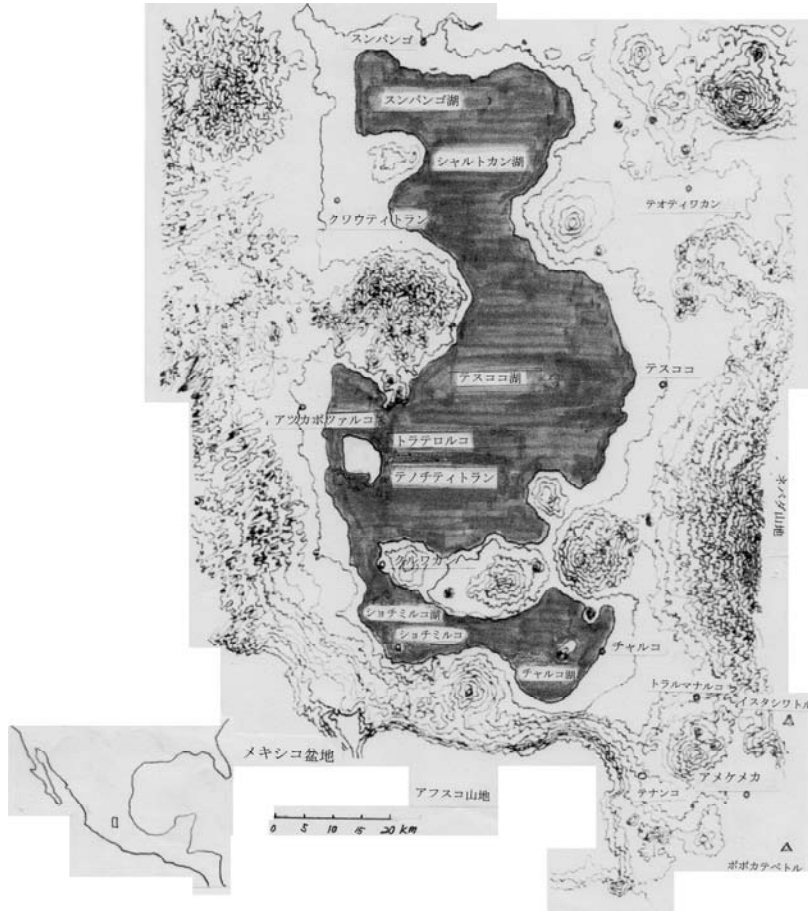
<sup>(12)</sup> 『第七』p.151～

<sup>(13)</sup> 『第八』p.349ほか

<sup>(14)</sup> Jalpa Flores, p.130

図1 16世紀のメキシコ盆地

Serra Puche y Castillo Mangas をもとに筆者が作成



ルパインもその先行きを懸念するほどであった<sup>(15)</sup>。

1521年にテノチティトランが陥落し、3年後にはフランシスコ会の「十二使徒」が到着してメキシコでの布教活動が本格的に始まる。1525年にはフランシスコ会士の1人がアマケメカ、トラルマナルコ、テナンコで「悪魔の家」を焼き払った<sup>(16)</sup>。それとは別に、十二使徒の長マルティン・デ・バレンシア師がアマケメカの洞窟で苦行を始め、その様子が住民に畏敬の念を起こさせた<sup>(17)</sup>。チャルコ地方でも1533年ころから教会が建てられ始めたが、フランシスコ会は1537年には同地方を放棄する。チマルパインは、同地方の

(15) 『第七』 p.113、『第八』 p.289

(16) 「悪魔の家」とは先住民の神殿ピラミッドを指す(『第七』 p.169)。

(17) 『第七』 p.183～；モトリニア p.335～

領主兄弟の争いに修道会が利用され、巻き込まれたことが原因であると示唆している。フランシスコ会に代わってドミニコ会が来るのはようやく 1550 年になってからであった<sup>(18)</sup>。

チャルコ地方での布教活動の実態やチマルパインが受けた教育について、詳細は不明である。しかし、家では絵文書の読み方を教わり一族や地方の歴史を学びながら、ドミニコ会修道院ではキリスト教と西欧文化を身につけたと思われる。そのことは、彼の著作に各種の絵文書が利用され、プラトンやソフォクレスなどのギリシア古典やアウグスティヌス、トマス・アクィナスなど中世ヨーロッパの著述家が引用されているのを見れば明らかである。14 歳になるとチマルパインはメキシコ市南東の外れにあるサンアントニオ・アバー教会に預けられ（あるいは自ら赴き）、残りの人生の大半をそこで過ごすことになる。地理的にも、教会の勢力図においても辺境にあったこの教会にどのような経緯で入ることになったのかはよく分かっていない<sup>(19)</sup>。

## § 2 サンアントニオ・アバー教会とチマルパイン

サンアントニオ・アバー教会<sup>(20)</sup>はメキシコ市の南東の外れ、ショロコ地区にあった。テノチティランから南へ向かい、イスタパラパやウィツィロポチコ（現チュルブスコ）に至るトラルパンの堤道が始まるあたりである。1519 年 11 月 8 日に当時のメシーカ王モテクソマがスペイン人らを迎え、出遭った地点に近く、地下鉄 2 号線にある同名の駅からも遠くない。

この教会の起源は、1530 年にアロンソ・サンチェスというスペイン人がメキシコ市会から与えられた土地に建設した庵である<sup>(21)</sup>。その後、未承認の

<sup>(18)</sup> 『第七』 p.205

<sup>(19)</sup> 1610 年 9 月 18 日に同教会で助祭となったドミニコ会士トマス・デ・リベラはチマルパインと同郷で、チャルコ地方の領主フワン・デ・サンドバル・テクワンシャカツィンの血縁者であった。16 世紀半ばまで同地方で強い力を保持したこの領主は注<sup>(12)</sup>を付した本文中で触れた兄弟の弟の方で、『第七』（p.192～）にもあるように、ドミニコ会最良であった。チマルパインがサンアントニオ・アバー教会に入ったのはおそらくこのリベラか、サンドバル家と関係があると思われる。ちなみに、チマルパインはサンドバル家が所有していた絵文書も資料として利用している（『第四』 p.353）。

<sup>(20)</sup> 「サンアントニオ・アバー」とは「大修道院長聖アントニウス」のことで、11 世紀に創設された聖アントニウス会はもともと、「聖なる火」と呼ばれた麦角中毒の治療を専門とした病院修道会であった。『日記』でもチマルパインはこの会の背景説明をしている（1614 年 4 月 29 日）。

<sup>(21)</sup> Zimmerman, Chimalpahin y la iglesia de San Antón Abad en México, p.13

ものも含め庵が乱立して運営が苦しくなったが、1560 年代後半に救いの手を差し伸べる人がいた。ディエゴ・ムニオンと大聖堂の神学博士サンチョ・サンチェス・デ・ムニオンである<sup>(22)</sup>。その甲斐あってか、1591 年 7 月 21 日、サンアントニオ・アバーの庵は祝別され、教会となった<sup>(23)</sup>。

教会として新たな船出をした 3 年後に、チマルパインはサンアントニオ・アバーにやって来た。どのような身分で、どのような仕事をしていたのかは分かっていない。ただ、先住民が聖職者になることも、修道会に入ることとも 16 世紀末には認められておらず<sup>(24)</sup>、フランシスコ会における<sup>ドナード</sup>献身者のような身分であったと考える人が多い<sup>(25)</sup>ことだけ確認しておきたい。なお、本人は次のように言っている。「大修道院長アントニオの修道士たちのお世話をし、…中略…大変幼いころから今年 1620 年まで 26 年以上にわたって同教会、修道院の…原文の一部破損…を務めてきた」。<sup>(26)</sup>

### § 3 チマルパインの著作

チマルパインは数々の著作を残しているが、いずれの作品も手稿の形で後世に伝わり、出版されるのは 19 世紀後半以降である。彼の手稿は大きく 2 つのグループに分けることができる。自分で資料を集め、それらをもとにして書いた著作と他の人の作品を書き写した筆写文献である。

著作としては、『歴史報告書』、『クルワカン市創設に関する簡潔な報告 Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacán』(以下、

<sup>(22)</sup> 後者は本国へ渡り、国王フェリペ 2 世に働きかけてメキシコ大司教モントゥファル(在位 1554~72)から支援の約束を引き出した(Alonso de Montúfar, 1570 年 4 月 20 日書簡、Epistolario de Nueva España, v.11, p89)。

<sup>(23)</sup> 礼拝堂付き司祭ホセ・メンデスと支援者ディエゴ・ムニオンの要請による(『日記』p.39)。

<sup>(24)</sup> 1530 年代に先住民の下級聖品を認めようとする動きがあったが、実際には叙品された先住民はいなかった。1555 年には「血の純潔」を理由にインディオの叙階が禁じられた。サアグン(p.144~)も先住民の叙階には否定的であった。

<sup>(25)</sup> 「献身者 donado」という訳語はモトリニア(p.335)による。この制度は Mendieta(p.444)によると他の修道会にはなかった。『日記』に登場する先住民の献身者は 2 人ともフランシスコ会士である(1609 年 10 月 3 日、1611 年 7 月 1 日)。そのフランシスコ会でも 16 歳以上でないと献身者になれなかった(Morales, p.22)が、チマルパインがサンアントニオ・アバー教会に来た時は 14 歳だった。なお、同教会は大聖堂の管理下にある在俗司祭が司牧する教会であり、別の名称で似たような制度があったのかもしれない。

<sup>(26)</sup> 『第八』p.271 では“(mayo)ral”「監督」とし、UNAM 版 p.73 では一部を欠けたままにして“…ral”としている。

『簡潔な報告』と略記)、『日記』がある。その手稿のほとんどは現在、パリのフランス国立図書館が所蔵しており、歴史報告は『第一報告書』から『第八報告書』(以下、『第一』、『第八』などと略記)まで、便宜的に8つに分けられている(表1)が、その順番や構成はチマルパイン自身によるものではない。この手稿が幾人もの手を経た過程でいろいろな人が整理を試みた結果である。

表1 チマルパイン歴史報告：各書の概要

書名	所在	フォリオ	言及範囲	主な内容
第一	BNF	1r~7v		天地創造、アダムとイブ；古典著述家
第二	BNF	9r~14v	1~50	聖書年代、四大陸
簡潔*	BNF	15r~67v	670~1299	メキシコ盆地主要都市・民族の歴史
第三	BNF	68r~115v	1063~1520	メシーカのアストラン出立~コルテス到着
第四	BNF	116r~122v	50~1241	チャルコ諸集団の起源、移住の歴史
第五	BNF	123r~138v	1269~1334	チャルコ地方テナンコの歴史
第五*	BNAH	1r~16v	1426~1522	テパネカ戦争、チャルコ戦争、コルテス歓迎
第六	BNF	139r~144v	1257~1612	チャルコ地方に定住した諸集団
第七	BNF	145r~224v	1272~1591	チャルコ地方トラルマナルコ他の歴史
第八	BNF	225r~272v		チマルパイン祖父の系図、依拠した資料群
日記	BNAH	17r~18v	1577~1589	
日記	BNF*	p.1~282	1589~1615	

「言及範囲」はそれぞれの書で扱われた年号

「簡潔\*」は『クルワカン市創設に関する簡潔な報告』

「第五\*」はUNAM版では続編として扱われていない

BNF：フランス国立図書館、メキシコ手稿#74

BNF\*：フランス国立図書館、メキシコ手稿#220

BNAH：メキシコ国立人類学歴史学図書館#256B

筆写文献はチマルパインが他の著述家の作品の一部あるいは全部を自ら書き写したもので、ロペス・デ・ゴマラの『メキシコ征服史 *La conquista de México*』<sup>(27)</sup>や、エルナンド・デ・アルバラード・テソソモクの『メシカヨト

<sup>(27)</sup> ゴマラ(1511~59)の書(1552年)は好評を博し、5年間で5版を数え、各国語に翻訳された。66年には発禁および没収の処分が下されたが、植民地ではまだ数多く出回っていた。チマルパインが注を加えた写本は1986年に再発見され、現在はシカゴのニューベリー図書館が所蔵。



ル年代記』(以下、『メシカヨトル』と略記)<sup>(28)</sup>などがよく知られている。このほか、最近までフランシスコ会のベルナルディーノ・デ・サアグン師の著作とされてきた『日常の霊操 *Exercicio quotidiano*』も、現存するのはチマルパインが書き写したものである<sup>(29)</sup>。彼の筆写文献の特徴は、チマルパイン自身による原テキストへの介入がしばしば見られる点にある。例えば、『メシカヨトル』では自分の名前を名乗ったうえで事実関係について別の見解を示したり、名前を出してはいないが、メシーカの話をしている箇所にはチャルコ地方の情報を挿むなどしている<sup>(30)</sup>。

チマルパインは母語のナワトル語はもちろん、スペイン語の読み書きもこなした。ラテン語についても多少の知識は備えていたと思われる。チマルパインは著作のほとんどをナワトル語で書いているが、ところどころスペイン語で書いた箇所もある。例えば、『第二』の一部、『第八』の書き出しや、筆写した『メシカヨトル』の要約部分である<sup>(31)</sup>。何語で書くかという問題は、当然のことながら、執筆目的や想定読者と関わってくる。すべてナワトル語で書いている場合、読者として念頭に置いていたのは先住民エリート<sup>(32)</sup>で、自分と同じ旧支配者層の末裔たちを主な読者として想定していた。一部だけがスペイン語の場合は判断が難しいが、将来、出版されることを考えて検閲の目を意識したためか、あるいはサンアントニオ・アバー教会の関係者に説明するためかもしれない。何しろ紙にしても、インクにしても決して安いものではなかったからである<sup>(33)</sup>。

チマルパインはどのような資料に依拠して執筆したのであろうか。引用の多い『第一』の資料に関する論文<sup>(34)</sup>がいくつかあるが、彼が引用したヨー

<sup>(28)</sup> 現存する『メシカヨトル』はチマルパインによる写本、もしくは 18 世紀半ばにその写本を複製した版のみで、1983 年に前者（これが *Codex Chimalpahin* に含まれている）が発見されるまで後者を底本とした UNAM 版が唯一利用可能であった。

<sup>(29)</sup> Schroeder, *Introduction to Codex Chimalpahin*, vol.2, p.3

<sup>(30)</sup> *Codex Chimalpahin*, vol 1, p.90-91, p.106-107

<sup>(31)</sup> UNAM 版にはないが、*Codex Chimalpain*, vol 1, p.26~p.59 に所収。なお酒井（2015）はこの部分を「巻頭文書」と呼び、『メシカヨトル』とは独立した文書で、著者はチマルパインではない可能性もあると指摘する。

<sup>(32)</sup> 『第八』(p.295, p.361) ほか。

<sup>(33)</sup> サアグンは、所属するフランシスコ会から費用削減を理由に『ヌエバ・エスパーニャ綜覧』の清書を一時、断念させられた（サアグン、p.88）ほどである。紙やインクが入手困難なためか、歴史報告に使われた紙の大きさや質、インクも多様である（Schroeder, *Annals*, p.2）。ただし、『日記』の紙は一樣だと言う。

<sup>(34)</sup> S.A.D.Messiaen, “Some interesting observations on Chimalpahin by us of his

ロッパの文献は他の教会や修道院から借り出したか、筆写を依頼されたものであろう。チマルパインは写字生を半ば本業のようにしていたという人もいる<sup>(35)</sup>。彼の引用作品は西欧の古典から、ほんの数年前に出版されたもの(1580年代の『ローマ殉教録 Martirologio romano』、1606年のエンリコ・マルティネス『ヌエバ・エスパーニャ宇宙誌・博物誌 Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España』)まで幅広い。スペイン王室による没収を逃れたサアグンの手稿<sup>(36)</sup>も利用した。さらに故郷チャルコ地方に伝わる数種の年代記に加え、テノチティランやウエフトラをはじめ各地の口承や絵文書など先住民の間に伝わっていた記録もふんだんに使っている<sup>(37)</sup>。クリストーバル・デル・カスティージョの手稿をほぼそのまま引用した箇所もある<sup>(38)</sup>。

チマルパインの手稿の存在は17世紀から知られていた。彼の死後<sup>(39)</sup>、おそらく直接にはなく誰かの手を経て、シグエンサ・イ・ゴンゴラ<sup>(40)</sup>が所有し、その死後はイエズス会に寄贈され、サンペドロ・サンパブロ学院の図書館で保管された。18世紀半ばにイタリア人の歴史書収集家ロレンツォ・ボトゥリーニが歴史報告の写本をとった<sup>(41)</sup>が、『日記』には手を付けなかった。ボトゥリーニが国外退去を命じられた後は、副王政府がその蔵書(写本を含む)を没収し、保管した。19世紀初めの独立戦争や独立後の混乱で保管責任が不明になっている間に、チマルパインの手稿は数々の愛書家の手に渡った。19世紀半ばにはフランス人ジョゼフ・モリス・アレクシス・オーバンが買い取って持ち帰った古文書の中にチマルパインの手稿もあった。それらがユー

---

Diferentes Historias Originales”, ECN34, p.219-256、Elke Ruhnau, “The First Relation of Chimalpahin’s Diferentes Historias Originales. Its sources and the author’s intention” Indiana 19/20 p.277-287

<sup>(35)</sup> Schroeder, The Annals of Chimalpahin, p.7

<sup>(36)</sup> León-Portilla, Un testimonio de Sahagún aprovechado por Chimalpahin サアグンの手稿については拙稿「アステカの絵文書 忘却の深淵から」を参照されたい。

<sup>(37)</sup> 『第八』 p.361

<sup>(38)</sup> 例えば『簡潔な報告』 p.93

<sup>(39)</sup> 1631年にも筆を執っていたが、没年については分かっていない。1660年とする研究者もいるが、根拠は示されていない。

<sup>(40)</sup> ゴンゴラ(1645~1700)は17世紀のメキシコを代表するクリオージョ知識人の1人。メキシコ大学で数学や天文学を教授したほか、詩作や歴史の分野でも数多くの作品を残した。『日記』の最後には「チマルパインはまだ生きてが…」などと書き加えた。

<sup>(41)</sup> León-Portilla, Estudio preliminar por... Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional, p.XXXV

ジン・グーピルの手を経てフランス国立図書館に同世紀末に寄贈され、今なお同図書館が所蔵している。

17 世紀末以降、チマルパインの手稿は何人かの著述家に読まれ、利用されてきた。メキシコのフランシスコ会の歴史を書いたアグスティン・デ・ベタンクール（1620～1700）もその 1 人で、参考にした著述家としてテソソモクやイシュトリルショチトルとともにチマルパインの名前を記している<sup>(42)</sup>。イエズス会のフランシスコ・ハビエル・クラビヘロ（1731～1787）も、追放先のローマで著した『メキシコ古代史 *Historia antigua de México*』にチマルパインの 4 種の著作群を挙げている<sup>(43)</sup>。

#### § 4 『日記』と 1608 年問題

誰が最初にそう呼んだのか、すでに 18 世紀には『日記』という名で知られていたものの、この呼び名は適切ではない<sup>(44)</sup>。前にも述べたように、同時代史の草稿とでもいうべきものである。『日記』で扱われている期間は 1577 年（7 の家）から 1615 年（6 の葦）10 月 14 日までで、本人の出生以前のことも書かれており、日々の出来事を綴った日記でないことは明らかである。

『日記』もほかの歴史報告と同じく、フランス国立図書館が所蔵しているが、カタログ番号は別である<sup>(45)</sup>。また、メキシコに残るわずかなチマルパイン文書の一部が、パリにある『日記』に欠けている最初の部分であることがルイス・レジェス・ガルシアによって明らかにされた<sup>(46)</sup>。

約 40 年にわたる『日記』の 1 つの特徴は、年により記述に濃淡があり、次第に濃くなっていくという点である（表 2）。最初のころほど大雑把かつ簡素で、何の記述もない年（1581 年、87 年）もある。1604 年から 06 年にはそれぞれ 6～7 ページを使い、07 年からはさらに分量が増加する。ピークの 1612 年と 13 年には 40 ページ前後にまで増え、1614 年、15 年と漸減するものの、それでもまだ多い。

<sup>(42)</sup> Vetancurt, *Teatro Mexicano, Catálogo de autores impresos, y de instrumentos manuscritos*, ページ表記なし

<sup>(43)</sup> Clavijero, *Historia antigua de México*, p.XXVIII

<sup>(44)</sup> 英訳者は『彼の時代の年代記 *The Annals of His Time*』としている。

<sup>(45)</sup> 歴史報告は BNF メキシコ手稿 # 74、『日記』は BNF メキシコ手稿 # 220 に分類されている。

<sup>(46)</sup> Reyes García, “Un nuevo manuscrito de Chimalpahin” *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia*, VII, t. II, p.333-348, México, 1971（筆者未見）

表2 『日記』の年ごとの記載ページ

年号	齢	記載の月日	fol/p	頁	年号	齢	記載の月日	p	頁
1577		1.31.~3末	17r		1597	18	1.20.~12.7.	19~21	3
1578					1598	19	2.4.~12.6.	21~23	3
1579	0				1599	20	2.10.~9.9.	23~24	2
1580	1	10			1600	21	1上~12.14.	24~27	4
1581	2				1601	22	1~5.6.	27~31	5
1582	3	7.22.~12.31.	17v		1602	23	4.25.~9	31	1
1583	4	3~6.29.			1603	24	4.20.~10.26.	32~33	2
1584	5		18r		1604	25	1.6.~12末	33~39	7
1585	6	1.20.~11.17.			1605	26	1~12.8.	39~44	6
1586	7	1.19. & 6.11.	18v		1606	27	1~12.6.	44~49	6
1587	8				1607	28	3~12	49~63	15
1588	9	10.19.			1608	29	1初~10	63~72	10
1589	10	4.10.	1				史的回顧	72~116	43
1590	11	1.1.~10.14.	2		1609	30	1.1.~11.30.	116~123	8
1591	12	2.4.~12.24.	2~4	3	1610	31	1.1.~12.16.	123~136	14
1592	13	1.21.~10.12.	4~6	3	1611	32	1.1.~12.19.	136~160	15
1593	14	3.28.~10.5.	6~9	4	1612	33	1.1.~12.28.	160~198	39
1594	15	1.3.~9.11.	10~14	5	1613	34	1.1.~11.30.	199~238	40
1595	16	1.28.~12.31.	14~16	3	1614	35	1.1.~12.16.	238~266	29
1596	17	4.2.~12.24.	16~19	4	1615	36	1~10.14.	267~282	16

「齢」：チマルパインの年齢

「記載の月日」：その年で取り扱われた最初と最後の日付け、または月

fol/p および p：folはBNAHのフォリオ番号、pはBNF、fond Mex.のページ番号

「1608年問題」とは、『日記』の1608年の項が終わったあと、前後と何の脈絡もなく唐突に先住民の歴史を振り返った年表式の「史的回顧」に関する問題である。回顧を始めるきっかけとなる大きな出来事があったわけでもなく、52年に1度めぐって来る「年の結び」でもない。彼が書いたのは一族の歴史や系図でもなければ、故郷チャルコ地方やその主要都市の歴史でもなく、メシーカ・テノチカの歴史であった。なぜ、どのような目的で「史的回顧」を書いたのか。この「史的回顧」で何を訴えようとしているのか。どの

ような資料を使ったのか、他の報告書と関連はあるのか、あるならどのような関連性があるのか、など謎が多い。

急に過去を振り返った理由について、1606年に相次いで亡くなった父と祖母の死を受けて、この世のはかなさを思い知ったためという人<sup>(47)</sup>もいる。また、1608年11月にオトゥンバ市当局に提出されたテスココの先住民史家、イシュトリルシヨチトルの作品に刺激を受けたと考える人<sup>(48)</sup>もいる。だが、いずれも説得力に欠ける。肉親の死後から2年も経ってから現世へのはかなさを感じる理由が分からないし、イシュトリルシヨチトルの作品をチマルパインが読んだ証拠もないからである。

チマルパイン自身は突如回顧を始めた理由について、何も語っていない。その理由を探るため、まず「史的回顧」を彼の他の歴史報告と比較し、その特徴を明らかにする。つぎに、「史的回顧」の執筆時期、依拠資料を探る。そうして初めてこの「史的回顧」でチマルパインが訴えようとしたものの理解に繋がるからである。

1608年の最後の日付けは10月15日で、前後の年と比べるとずいぶん早い。そしてすぐに「史的回顧」が、次のような書き出しで始まる。

12の火打石の年、1608年の末にあたり、最初に神がこの世をお作りになり、創造なさってから、天と地とそこに存在するあらゆるものを形作られてから、どれだけの時間が経過したのかを述べ、記録する。同様に、はるか昔に起こったことについても述べていく。…中略…最初にこの世が作られ、創造されてから、我らが主である神の1608年という年の末である今まで6361年もの歳月が過ぎた。<sup>(49)</sup>

つづいて1608年までにノアの大洪水から4165年、ローマ建国から2361年、チチメカ・メシーカがアストラン・テオコルワカンに上陸して1559年、そこを出てから545年が過ぎた等々、1608年の出来事に至るまで綴られる。常に、「～してから1608年まで…年が過ぎた」という言い方で。このような書き方はチマルパインのほかの歴史報告でもしばしば見られる。そして「史的回顧」の締め括りとして、メキシコの聖俗支配者の一覧が示される。まずはアストランを出てから1608年まで31代にわたるメシーカ・テノチカの統

<sup>(47)</sup> Tena, *Presentación al Diario*, p.14. 1606年に出版されたエンリコ・マルティネスの著作の影響も指摘されており、この点で異論はない。

<sup>(48)</sup> Víctor Castillo, *Estudio preliminar de Memorial brebe*…, p.XXVII

<sup>(49)</sup> 『日記』p.141 (拙訳)

治者の一覧が挙げられ、続いて征服後のスペイン人支配者、メキシコ大司教、異端審問官のリストが続く。

#### § 4 - I. 「史的回顧」の特徴

歴史叙述としての「史的回顧」には次のような特徴を指摘できる。

(i) キリスト教的普遍史：「史的回顧」は天地創造、ノアの大洪水から始まり、ローマ市創建をはさんで、キリストの生誕と十字架上の死について述べている<sup>(50)</sup>。つまり、当時のヨーロッパの歴史叙述と同じく、メキシコ先住民の歴史をキリスト教的普遍史の枠組みでとらえようとしている。

(ii) 「先住民＝離散ユダヤ起源」説の否定：キリストの死から 18 年後の紀元 50 年にはメシーカの祖先がアストランに着岸したことが、続いて紀元 70 年にはローマ皇帝ウェスパシアヌスによりイェルサレムが破壊されたことが述べられる。この 2 つの事項は一見、関連がなさそうに見えるが、実は重要な示唆を含んでいる。後者はユダヤ民族離散の契機と見なされた出来事であり、メシーカの祖先はそれ以前にすでにアメリカ大陸に到達していたと言っているのである。当時、聖書に言及のないアメリカ先住民の起源を離散ユダヤ人に求める説<sup>(51)</sup>が流布していたが、チマルパインはそれに真っ向から反論したことになる。

(iii) 東方起源説：先住民の祖先は海路、北方から南下し、メキシコ東北部に着いたとしている。当時、メシーカの故地アストラン<sup>(52)</sup>はヌエボ・メヒコ（現在のアメリカ合衆国南西部）、つまり真北か北西寄りにあり、人びとは

<sup>(50)</sup> 「史的回顧」では、天地創造は紀元前 4754 年、ノアの大洪水は前 3557 年に起こったことになる。他の歴史報告（『第二』、『第三』、『第四』、『第七』、『簡潔な報告』）では、天地創造が前 5199 年、ノアの大洪水が前 2957 年、バベルの塔の崩壊が前 2800 年となっており、依拠資料が異なる。「史的回顧」以外は『ローマ殉教録』にもとづきエウセビオスやヒエロニムスの年代学を踏襲している。

<sup>(51)</sup> Mendieta「このインディオたちはティトゥスおよびウェスパシアヌス両皇帝によるイェルサレムの破壊を逃れ、海路、あちらこちらの土地を駆けずりながらやってきたユダヤ民族の末裔であった」（p.539、拙訳）。また、Durán も先住民の人付き合いの拙さなどがユダヤ人のそれを思わせると言う（Tratado Primero, Historia, p.53）。他方、アコスタ（上、p.157～）や Torquemada（Lib.1, c. IX, I, p.22～）はユダヤ起源説を否定している。

<sup>(52)</sup> アステカとは「アストラン（驚の土地）の人たち」を意味するが、守護神ウィツィロポチトリのお告げに従い、理想の棲家を探す旅に出た。テノチティランに至るまでの旅を巡歴とよぶが、その途中でやはり神のお告げでアステカという名を捨て、メシーカと名乗るようになった。

歩いて移動したと考えられていた。船に乗って東から来訪した話をここで取り上げたのは、先住民がヨーロッパを含む旧世界から来た可能性を示唆し、アダム・イブの系統に属していると言おうとしているのである。

(iv) 先住民の単一起源説：紀元 84 年ころからアストランの人たちはいくつかの集団に分かれてチコモストクへ出かけるようになり、言葉の分裂が生じたが、それまで言葉は 1 つだったと言う。つまり、メシーカ以外の先住民もルーツは同じであると見なしていることになる。そのため、後の記述は先住民の代表としてメシーカを選び、その歴史を中心に扱い、ところどころチャルコやテスココについての言及を加えるにとどまっている。

上で指摘した「史的回顧」の特徴は、じつは他の歴史報告にも共通している。(i)の普遍史観は『第二』と同じ発想であり、自分たち先住民はその祖先を含めアダムとイブの系譜に属しており、神による救済に与りうると考えに基づいている。(ii)の先住民のルーツが離散ユダヤ人ではないという主張は『第四』、『第七』でも見ることができる。特に『第四』はユダヤ人起源説をきっぱりと否定している<sup>(53)</sup>。また、自分たちの祖先が北あるいは東から船に乗って来たという(iii)の説は、『簡潔な報告』でもサアグンを引き合いに出し、「何年の出来事だったかは不明だが、オルメカ・シカランカ人が北からタモアンチャンという楽園をめざして南へ向かい、アメケメカンに住みついた」と述べている<sup>(54)</sup>。この点に関連して注目すべきは、1606 年に出版されたエンリコ・マルティネスの著作である。天文学や土木工学に詳しく、異端審問所で通訳も務めたドイツ系移民のマルティネスは、アメリカ先住民とよく似た人たちがポーランド王の支配するクールラント地方にいとこの著で述べている。そこの住民は周辺の白人とは見た目も言語も異なり、肌の色や体格、性格などの点でアメリカ先住民に近いという<sup>(55)</sup>。サアグンとマルティネスを読んだチマルパインは刺激を受け、自分たちの祖先の来し方が一本の線につながり、「史的回顧」を書く契機となったはずである<sup>(56)</sup>。

<sup>(53)</sup> 『第四』 p.313

<sup>(54)</sup> 『簡潔な報告』 p.29、『第二』 p.65、サアグン p.12 と p.138 のほか、ロベス・アウスティン、León Portilla の論考も参照のこと。

<sup>(55)</sup> Henrico Martínez, p.204 : クールラント Curlant は現ラトビア共和国の首都リガを流れるドヴィナ川の左岸一帯を指す。13 世紀前半にドイツ騎士団が征服し、住民をキリスト教化した。16 世紀半ば過ぎにはクールラント公国としてポーランドの保護下に入った。

<sup>(56)</sup> 『第二』 p.65 ではマルティネスの名を挙げ、クールラント地方の住民の特徴に触

#### § 4 - II. 『日記』と「史的回顧」の執筆時期

次に、チマルパインが参照した資料を検討する前に、『日記』と「史的回顧」がいつ書かれたのかを検討する。これがある程度はつきりしないと、参照関係は分かっても、どちらがどちらを参照したのかが不明なためである。まず、『日記』はチマルパインが観察してすぐにしたものばかりではなく、多少時間が経ってから書いた箇所も少なくない。自身の誕生前のことは言うまでもないが、チマルパインがサンアントニオ・アバー教会に来るまでの部分は特にそうである。1593年以降の記事の中にも、後から書かれたであろう箇所もある<sup>(57)</sup>。もちろん自分が目撃したことを時間をあけずに記録したと思われる箇所も、サンアントニオ・アバーに来て間もないころから見受けられる<sup>(58)</sup>。それに対して、『日記』の終りごろでも、後から思い出して書き加えたり<sup>(59)</sup>、日付けが相前後するところ<sup>(60)</sup>もある。とは言うものの、1年あたりの分量が急に増える1607年以降は、実際の日付けからあまり時間をおかず書かれた可能性が高い。というのは、ロドリゴ・デ・ビベロに同行してきた徳川使節団<sup>(61)</sup>や支倉使節団<sup>(62)</sup>の様子、日食に対する人びとの反応<sup>(63)</sup>、副王・大司教の地震への対応の批判<sup>(64)</sup>など臨場感あふれる描写をしており、現

れている。

<sup>(57)</sup> 1593年6月6日、聖ヨセフ礼拝堂の正面上部に設置された鷲の像は「今日も見る事ができる」などは後から書かれたはずであるが、その「今日」がいつなのかは不明。

<sup>(58)</sup> 例えば、1594年3月19日にお披露目されたダマスク織の旗の図案や、歴代メシコ統治者の姿などは当日ではなく、後から見たにせよ、自分で観察したと思われるほど詳しい。同年、7月25日には「これが今、私たちがいる年」であると記している。

<sup>(59)</sup> 1613年5月末にショロコ地区での十字架を巡る騒動について書いた後、その半月前にも同じような十字架騒動があったことを思い出して書き足している。

<sup>(60)</sup> 1610年11月17日が先に来て、15日がその後になっている。上の注(59)とこの(60)の例は「あまり時間をおいていない」部類に入れてよからう。

<sup>(61)</sup> ビベロはヌエバ・エスパーニャ副王ベラスコの縁者で、任地のマニラからの帰途、漂流中を日本人に助けられ、徳川秀忠や家康とも謁見。1610年、幕府の援助でメキシコに戻る際、その使節を連れ帰った。彼の記録は『ドン・ロドリゴ日本見聞録』(1941)として邦訳がある。

<sup>(62)</sup> 仙台藩主の伊達正宗がローマに派遣した支倉常長を長とする使節は1614年3月、メキシコ市に到着した。

<sup>(63)</sup> 1611年6月10日にはフワン・バウティスタの書をもとに日食の原理を説明。予測された時間より日食が遅く起こったことや人びとの反応を活写している。

<sup>(64)</sup> 1611年8月26日午前3時に大きな地震があり、建物や道路が大きな害を被った。副王兼大司教のガルシア・ゲラは折しも捧げず、被害状況を見て回りもせずに関牛見物を優先した。その最中に余震があり、各地で服喪の鐘が鳴らされても、見物を止めなかったとチマルパインは非難している。また、翌年に大々的に執り行われたグラ大



場で克明なメモをとったと思わせるほど細かなところまで観察し、記録しているからである。

他方、「史的回顧」については 1609 年に書かれたと断定してよい。執筆時期を特定できるからである。1608 年の最後の記事（10 月 15 日）は「オアハカ司教だったコバルビアスがミチョアカン司教に任命され、（任地へ）移動する途中でメキシコ市に立ち寄り、1609 年 3 月末まで 4 ヶ月半(♫)滞在した」<sup>(65)</sup>というもので、これも実際の日付けより後に書かれたことを物語る。さらにその直後から「史的回顧」が始まり、その末尾に歴代のメシーカ統治者および植民地時代のメシコ・テノチティトランの先住民統治官の一覧が掲げられている。その最後、第 31 代フワン・バウティスタについて「今年 1609 年も統治官である」とのコメントがある。実際、彼は 1609 年 1 月に統治官になったが、同年 11 月には故郷のマリナルコに帰ってしまう<sup>(66)</sup>。したがって、「史的回顧」は早くても 1608 年 10 月（おそらく 09 年 3 月）から 09 年 11 月の間に書かれたことになる。

#### § 4 - III. 参照資料

『日記』全体を見た場合、内容あるいは形式として近いのは、植民地時代に言及がある報告書<sup>(67)</sup>のうち『第七』（1272～1591 年）である。『日記』が取り上げ始めた 1577 年から数年間の記述を『第七』のそれと比較（表 3）すると、その近さは一目瞭然である。『第七』で扱われた事柄の多くは『日記』でも取り上げられている。例えば、1585 年に開催された第三回地方公会議に参加した司教 6 人を列挙した箇所では挙げる順序まで同じである。空白部分も似通っており、1581 年にはどちらにも何も記述がない。1587 年は『日記』が空白であるのに対し、『第七』に記述はあってもごくわずかである。また、1586 年はどちらも、1 月 19 日と 6 月 11 日の記述しかない。しいて違いを探すなら、『第七』ではチャルコ地方の、『日記』ではメキシコ市の出来事がより多く取り上げられているということであろう。このように 1577～91 年の記述について、『日記』と『第七』は一方が他方を参照したか、同じ参考資

---

司教の葬儀に参列した人びとの描写はじつに細かい。

<sup>(65)</sup> 『日記』 p.141

<sup>(66)</sup> 『日記』 p.205

<sup>(67)</sup> ほかに『第五』はテノチティトラン陥落の翌年まで、『第六』は 1612 年までを扱っているが、各年の記述量は少ない

料に依拠していることは明らかである。そして、チマルパインの年齢と 93 年に 14 歳でサンアントニオ・アバーに來たことを考えれば、『日記』の方が『第七』（あるいはその元の資料）を下敷きにしていると言えよう。

表 3 チマルパイン『日記』と『第七』の内容比較（1577～1591）

日記		第七
テレサ・デ・ヘスス『靈魂の城』 1. 2月疫病流行も3月に収束；被害者先住民・黒人 <b>彗星現る</b> ；tlahuahualiztli上演 跣足フランシスコ会、一時滞在（フィリピン布教へ）	1577	1. 2月疫病で死者。3月小康、4月下火；先住民・黒人の死者多数 ツァクワルティラン・テナンコの貴族、アヨポチツイン死去 彗星現る(11)
イエズス会教会への宗教行列（ローマから聖遺物）	1578	イエズス会の宗教行列（ローマから聖遺物）
アロンソ・デ・モリーナ死去 サンタ・クララ会修道女がペトラカルコへ移動	1579	チマルパイン誕生；ツァクワルティラン・テナンコ領主の家系図 アロンソ・デ・モリーナ死去；彼の業績 再び、疫病 サンタ・クララ会修道女がペトラカルコへ移動（今もそこに）
副王M・エンリケスがペルーへ転出 新副王コルーニャ伯が到着（10.4.）；跣足フランシスコ会士も再び彗星が現る	1580	イツトラコサウカン領主、テポストリシャヤカツイン死去 副王M・エンリケスがペルーへ転出 新副王コルーニャ伯が到着（10.4.）；跣足フランシスコ会士も再び、彗星が現る
...	1581	...
水道がサンフワンまで（7.22.）、市場に水が届く（12.31.）	1582	地震(5)；アマケメ山頂のサンタクルス <small>の</small> 庵が崩壊
水路の修理・清掃に多くの人が参加 ベアタらがサンタ・モニカ修道院に居を定める S・ギジェルモ・トラパンでキリスト磔刑像が発見され、都へドミニコ会がはじめて宗教行列 コルーニャ伯が死去（6.29.）大司教モヤが副王代理を兼任	1583	アマケメ山頂の洞窟にM・デ・バレンシアの墳墓建設（6.20.） S・ギジェルモ・トラパンのキリスト磔刑像がメキシコ市へドミニコ会が初めて宗教行列 サンタ・モニカのベアタらが居を定める コルーニャ伯が死去（6.29.）；大司教が副王を兼任
ペラ判事がフィリピンへ出発（楽器演奏者が送り出す） モヤが総巡察官も兼任 修道士の説教禁止（在俗化）・ <b>大聖堂の落成</b>	1584	モヤが総巡察官も兼任 大聖堂の修復が始まる
各地の司教が集まり、地方公会議開催；記念の宗教行列 新副王ビジャマンリケ侯着任；カルメル会神父も同行	1585	各地の司教が集まり、地方公会議開催（1.20.）；記念の宗教行列 大聖堂の修理が終わる（8.15.）： <b>新副王ビジャマンリケ侯着任</b>
カルメル会がサン・セバスティアン教会に（1.19.） 要職を歴任した大司教モヤがスペイン帰国へ（6.11.）	1586	副王に同行したカルメル会がサン・セバスティアン教会に（1.19.） 要職を歴任した大司教モヤがスペイン帰国へ（6.11.）
	1587	イツトラコサウカン領主、トマス・チチメカテクトリ死去 コヨアカンで主の受難と埋葬の初上演
疫病が猛威をふるう 跣足修道士とフランシスコ会と特使との意見が対立	1588	スペイン人法官フワン・パウティスタがテクワニバン領主を逮捕 ドミニコ会のフワン・パエス師がアマケメカを去る羽目に
地震（4.10. & 4.26.） 副王の娘F・ブランカ嬢が死去（7.9.） サンファン教会、サンタ・マリア教会がフランシスコ会所有に モンセラットの聖母像をテキスキパン地区に安置（8.5.） サンファン教会とサンタマリア教会の件（11.29.） フワン・ゴンサレス神父が苦行から戻る（12.30.）	1589	ミゲル・パウティスタがテクワニバン領主に スペイン人G・ロベスがメキシコ市郊外の荒れ野で苦行（5.22.） モンセラットの聖母像をテキスキアパンに安置（8.5.）
フワン・ゴンサレス神父が死去（1.1.） 副王ビジャマンリケ侯退任（1.18.）、新副王ベラスコ着任 サンフランシスコ教会の祝別（2.11.） ベルナルディーノ・デ・サアグン師が死去（2.5.）	1590	ウエウエトランで苦行したフワン・ゴンサレス神父が死去（1.1.） 副王ビジャマンリケ侯退任（1.18.）、新副王ベラスコ着任（1.25.） ベルナルディーノ・デ・サアグン師が死去（2.5.） サンフランシスコ教会の基礎、祝別（2.11.）

水路の清掃工事		異端審問の処刑式(2.24.)
国王フェリペ2世の兄、ドン・アントニオをプエブラで逮捕		旧サンフランシスコ教会の閉鎖(8.26.)
サンホセ礼拝堂に御聖体を移動		サンホセ礼拝堂に御聖体を移動(10.14.)
教皇シクストゥス5世崩御		
崩御した教皇の追悼式(2.4.)	1591	イツラコサウカン領主にJ・M・ミイサイツイン
跣足会に敷地を提供		跣足フランシスコ会に土地を提供(2.5.)
サンフランシスコ教会の取り壊しが始まる(3末)		サンホセ礼拝堂に新たな信徒会(ソレダー)設立(4.12.)
サンホセ礼拝堂に新たな信徒会(ソレダー)設立(4.12.)		その設立に献身的に取り組んだ方々の名前
サンフランシスコ教会の土地割り始まる(4.29.)		
前大司教モヤがインディアス枢機会議議長に就任の報		
トラスカラの人たちがヌエボ・メヒコへ向け出発		
ドン・アントニオの無事帰国を祈って宗教行列		
サンアントニオ・アパーで初めて御聖体行列(祝別)		
トラスカラ人をコンポステラまで送ったカノが戻る(8)		
サン・ディエゴ像が安置される		

濃い背景および太字は共通する案件

では「史的回顧」の参照資料はどうであろうか。表4は「史的回顧」で扱われた出来事がほかのどの歴史報告で取り上げられているかを示したものである。内容的に重なる書はいくつもあるが、中でも多く重なっているのが『第三』、『第五』、『第七』、『簡潔な報告』であることが分かる。征服以降については『第七』が1591年までカバーしているため、ますます関わりが深くなっている。91年以降は当然のことながら、『日記』本体との重なりが大きい。

表4 チマルパイン 「史的回顧」と歴史報告

西暦	経過年	M暦	「史的回顧」の主な内容	同じ件に言及した他の歴史報告など
前4753	6361		天地創造	②、④、⑦[5199BC]
前2557	4165		ノアの大洪水	②、④、⑦[2956BC]
前753	2361		ローマ建国	② cf.ロムルス伝説
0	1608		キリスト誕生	
32	1576		キリスト刑死	
50	1559		チチメカ・メシーカ、アストラン上陸	②、④
70	1538		ウェスパシアヌス帝、イエルサレム破壊	④[73]
84	1524		メシーカ、アストラン(35年滞在)を出てチコモストックへ(?) 集団に分かれ、単一だった言語が複数化し、混乱生じる	④
670	940		チチメカ・クルワがクルワカン定住	簡潔
708	892		クルワカン初代領主にトピルツイン・ナウヨツイン	簡潔[717]
1064	545		メシーカ、アストラン(1014年滞在)出る	③、④、簡潔、メシカヨトル
1068	541		巨木(樹齢1008年)の下に到着、一時滞在	③[1065?],メシカヨトル[巨木、倒壊]
1075	534	12葦	メシーカ、チコモストック(7年滞在)出る 荒野を移動	③[チコモストックに到着] メシカヨトル
1160	449	6石	トリンパネカ・アマケメカ、チコモス出る	③、④、簡潔

1168	441	1石	クワウトレケツキ、コアテペクで(メシーカ)の首長に	⑦(?), メシカヨトル
1205	404	12家	クワウトレケツキ(38年)没; アカシトリが継承	⑦、メシカヨトル[1153?]
1219	404	13葦	アカシトリ(15年)没; シラルツインが継承	⑦、簡潔[1167]
1234	377	2兎	シラルツイン(16年)没; ツインパンが継承	⑦、簡潔[1182]
1235	376	3葦	ツインパン(2年)没; トラソツインが継承	⑦、簡潔[1184]
1239	371	7葦	トラソツイン(5年)没; トスクエクエシュトリが継承	⑦[6年]、簡潔[1188]
			テクパヨカンで年結び	簡潔[1247] * Aubin[2葦]
1241	369	9家	トリンパネカ、チャルコ着	③、④、簡潔
1269	342	11家	アマケメ山頂で4君主会合(互いに矢を放ち、無傷=チチメカの証) ⇒ アマケ山を二分し、町建設	⑥
1278	332	7兎	トスクエクエシュトリ(40年)没; ウイツィルウイトルが継承 チャブルテペクに居を定める(メシーカ)	⑦、簡潔[1227] ⑥[1298]、⑦[1280]、簡潔[1280]
1299	310	2葦	ウイツィルウイトル捕捉され、クルワカンで生贄に その後、メシーカ四散; テノチが継承 アストラン出て236年、チコモストクを出て225年; メシーカは4回、年結びし、この年5回目 クルワカンにクルワ人住んで630年、領主が誕生して583年 トルテカが滅亡して260年 メシーカはショチミルコとの戦いで耳削ぎ	③、⑤、⑦、簡潔、メシカヨトル 簡潔 メシカヨトル メシカヨトル ③[1247]
1307	302	10葦	クルワカン領主コシュコシュトリ(27年)没 その後、クルワカンは16年間、領主なく臨時領主のみ	③、⑦、メシカヨトル ③
1323	286	13葦	ティサパンにいたメシーカの迫害再開 メシーカはニシュティクバクで1年	⑤、⑦[メシーカをティサパンから追放] メシカヨトル
1324	285	1葦	アカマピチトリがクルワカン君主に チャルコで花戦争始まる	③、⑦ ③、⑤
1325	284	2家	メシーカ、テノチティランに定住 指導者12人(コピル含む)+2人	③、⑦、メシカヨトル ③[10人]、メシカヨトル[13人]
1336	273	13石	クルワカン領主アカマピチトリ没	③、⑦
1337	272	1家	メシーカ分裂; トラテロルコ建設の指導者12人	③、⑦、メシカヨトル[15人]
1363	246	1葦	テノチ没(39年)の後、空位3年	⑦、メシカヨトル
1367	242	5葦	アカマピチトリ、テノチティラン領主に	③[1366]、⑦、メシカヨトル
1387	222	12石	アカマピチトリ没(21年)	③[1389]、⑦
1391	218	3葦	ウイツィルウイトル2世が領主に	⑦、メシカヨトル
1402	207	1兎	テスココでネサワルコヨトル誕生	⑦
1415	194	1葦	ウイツィルウイトル没(25年); チマルポボカが継承	③[1417]、⑦、メシカヨトル
1426	183	12兎	チマルポボカ暗殺(12年)、アスカボツアルコのテパネカ人に	③[1427]、⑦、メシカヨトル
1427	182	13葦	イツコワトルがテノチティラン領主に	⑦、メシカヨトル
1428	181	1石	アスカボツアルコ敗北	③、⑦、メシカヨトル
1431	178	4葦	ネサワルコヨトルがテスココ領主に	③、⑦
1440	169	13石	イツコワトル没(14年); モテクソマ1世が継承	③[1441]、⑦; ⑤、メシカヨトル
1454	155	1兎	「1-兎」の大飢饉	③、⑤、⑦
1464	145	11石	ネサワルピリ誕生; 干ばつ	: ⑤
1465	144	12家	チャルコがメシーカに敗れる	③[1464~65]、⑤、⑦
1468	141	2石	モテクソマ1世没(29年)	③[1468、69]、⑤、⑦、メシカヨトル
1469	140	3家	アシャヤカトル即位	③、⑤[1468]、⑦[1468]、メシカヨトル
1472	137	6石	ネサワルコヨトル没(42年); ネサワルピリが9歳で継承、即位	③、⑤、⑦
1473	136	7家	トラテロルコ、メシーカに敗れる	③、⑤、⑦、メシカヨトル
1481	128	2家	アシャヤカトル没(13年); ティソク即位 ウイツィロポチトリ神殿、改築へ	③、⑤、⑦、メシカヨトル ⑤、⑦[1482]

## チマルパインと1608年

1486	123	7兎	ティソク没(6年)、アウイツトル即位	③、⑤、⑦、メシカヨトル
1487	121	8葦	ウイツロポテトリ大神殿の落成	③、⑤、⑦
1499	110	7葦	大水害で首都が冠水;コヨアカンとウイツロポテチの領主死	③、⑦
1502	107	10兎	アウイツトル没(13年):モテクソマ2世、継承	③[1503]、⑤、⑦、メシカヨトル
1515	92	10葦	ネサワルピリ没(46年)	③、⑤[1517]、⑦
1516	91	11石	カカマツインがテスココ領主に	③、⑦
1519	90	1葦	スペイン人がヌエバ・エスパニーニャ到着	③、⑤、⑦、メシカヨトル
1520	89	2石	モテクソマ2世没(19年):クイトラワク即位、在位80日で没	⑤、⑦、メシカヨトル
1521	88	3家	クワウテモクが即位 スペイン人がテノチティラン破る:クワウテモク捕捉	⑦、メシカヨトル
1524	85	6石	フランシスコ会修道士12人到着 メシーカ領主らを監禁・拷問(スペイン人が失った黄金の在りか) コルテス中米遠征に先住民領主らを同行し、同地で洗礼	⑦ ⑦ ⑦:⑦△
1525	84	7家	クワウテモクらをウエイモランで絞首刑に(陰謀容疑) 領主代理に指名されたトラコツインも帰途、病没 モテルチウツインがあらたな領主代理に	⑦、メシカヨトル ⑦、メシカヨトル ⑦、メシカヨトル
1526	83	8兎	コヨアカン領主にイツロンキ:中米から遠征隊、帰還	⑦
1527	82	9葦	サンフランシスコ教会で洗礼	⑦[1525~]
1529	80	11家	メシコ市で結婚の秘跡	⑦
1530	79	12兎	テオコルワカン(ヌエバガリシア)征服へ出発 同行したモテルチウツイン、アスタランで没(5年)	⑦ ⑦、メシカヨトル
1532	77	1石	ショチケンツインが領主代理に ヌエバガリシア遠征隊が帰還	⑦、メシカヨトル ⑦、メシカヨトル
1534	75	3兎	A・メンドサ副王着任	⑦[1535]
1536	73	5石	ショチケンツイン没(5年)	⑦、メシカヨトル
1539	71	7兎	ワニツインが初代統治官に就任	⑦[1538]、メシカヨトル
1541	68	10家	ワニツイン没(4年):テウエツキティツインが統治官に ショチピラン反乱(ミシュトン戦争)鎮圧に参加	⑦、メシカヨトル ⑦、メシカヨトル
1545	64	1家	疫病流行;S・イボリト市場設置	⑦
1548	61	4石	(大)司教スマラガ没(21年)	⑦
1551	58	7葦	副王ルイス・デ・ベラスコ着任	⑦[着は1550.11.12.]
1554	55	10兎	テウエツキティツイン没(14年) 大司教モントウファル着任	⑦、メシカヨトル ⑦
1557	52	13家	セセツイン(ワニツインの子)が統治官に	⑦、メシカヨトル
1559	50	2葦	サンホセ礼拝堂にカール5世葬儀碑	⑦
1562	47	5兎	セセツイン没(6年)	⑦[死亡日時には2説]、メシカヨトル
1563	46	6葦	ナナカシバクツインが統治官に	⑦
1564	45	7石	副王ベラスコ没(14年);新税導入	⑦[死亡日時には2説]
1565	44	8家	ナナカシバクツイン没(3年):貴族出身者はこれが最後	⑦、メシカヨトル
1566	43	9兎	アピラ兄弟ら反乱準備の容疑で処刑 副王G・デ・ペラルタ着任	⑦ ⑦
1568	41	11石	F・ヒメネスが法官・統治官に着任(初の外部出身者) G・デ・ペラルタ、帰国の途に M・エンリケス副王(エンコミエンダなし)着任	⑦、メシカヨトル ⑦ ⑦
1572	37	2石	大司教モントウファル没(19年) F・ヒメネスは帰郷(5年)	⑦ ⑦[1569.7.14.:1年5カ月]、メシカヨトル
1573	36	3家	A・パレリアーノ(ワニツインの娘婿)がメシコ法官・統治官に	⑦のテキスト欠落、メシカヨトル
1580	29	10石	M・エンリケス、ペルー副王に転出(13年) コルーニャ伯(エンコミエンダなし)着任	⑦ 日 ⑦ 日

1583	26	13葦	S.Gトランパで発見のキリスト磔刑像がメシコ市へ 副王コルーニャ伯、没(2年8ヵ月33日 ママ)	⑦ 日 ⑦ 日 [2年9ヵ月]
1584	25	1石	大司教M・コントレラスが巡察使、副王に	⑦ 日 [前年とする記録も]
1585	24	2家	地方公会議の開催; 記念の行列 副王ビジャマンリケ侯着任	⑦ 日 ⑦ 日
1586	23	3兎	M・コントレラス帰国(司教10年、副王3年)	⑦ 日
1590	19	7兎	ビジャマンリケ侯、帰国へ(5年); 新副王にペラスコ2世	⑦ 日
1594	15	11兎	大司教ボニージャ(ペルー巡察中)の代理にセルバンテス	日
1595	14	12葦	ペラスコはペルー副王に(5年10ヵ月); 後任にモンテレイ伯	日
1596	13	13石	メスティンのJ・マルティンがバレリアーノを補佐する代理官に	日 [メスティンの言及なし]
1599	10	3葦	ハルトカン出身のメスティン、J・ロペスが法官・統治官に バレリアーノは辞任(27年); J・マルティンはトラテロルコに	日 [メスティン言及なし] 日 [バレリアーノ言及なし]
1600	9	4石	大司教ボニージャはペルーで客死	日
1602	7	6兎	大司教メンドサ・イ・スニガ着任	日
1603	6	7葦	副王モンテレイ伯、ペルーへ(7年11ヵ月) 新副王モンテスクラロス侯、着任	日 日
1606	3	10兎	大司教メンドサ・イ・スニガ没(4年)	日
1607	1	11葦	副王モンテスクラロス侯、ペルーへ(3年8ヵ月) ペラスコ、副王就任(2期目)	日 日
1608		12石	J・ロペス没(10年8ヵ月21日); 新任はマリナルコ出身の フワン・パウティスタ(アストラン以来、32代目の統治者)	日 [ここで出身地とメスティンに言及] 日

M暦 メシーカ暦(1~13の数字+4種の記号:家・兎・石・葦)

○数字: 同じ件に言及した関連書: ③は『第三報告書』、⑦は『第七報告書』、日は『日記』

簡潔は『クルワカン市創設に関する簡潔な報告書』、メシカヨトルは『メシカヨトル年代記』

食い違いがある場合、書名の後に[ ]で示した。

人物名の後の( )の年数は在位・在職した年数

さらに、メシーカ統治者の名前・治世に関する情報だけを取り出し、比較した表 5 を検討すれば、「史的回顧」とテソソモクの『メシカヨトル』の近さも見えてくる。『簡潔な報告』と『第七』にも似た情報があるので、参考に挙げておいた。いずれもよく似ているが、次のような特徴を指摘できる。

(i) 最初の3代の領主、つまりメシーカがアストランを出た時の領主とその次の2人の名を挙げているのは、「史的回顧」末尾の一覧と『メシカヨトル』だけである。

(ii) 『メシカヨトル』は第4代から第8代にかけては触れていない<sup>(68)</sup>。

(iii) チマルパイン主要著作は第4代から第10代まで名前も、順序も同じであるが、在位の年数や期間に食い違いが見られる。

(iv) 第9代ウィツィルウィトル以降に関しては、どの書も名前、順序、在位期間ともほぼ同じで、大きな違いは見られない。

<sup>(68)</sup> この底本になったと思われる『メシーカ年代記』にも、その期間を扱っているはずの第4章、第5章が欠落している。

表5 チマルパインによるマヌーカ歴代統治者一覧

代	日記(史的回顾一覽)	日記(史的回顾-本体)	在位	簡潔な報告	在位	第七報告書	代	在位	クニコカゾカヨトル	在位
1	モツクマ	...		モツクマ		...	1	33年	モツクマ	
2	チヤルチカ・ソトナク	...		チヤルチカ・ソトナク	1064	...	2	38年	チヤルチカ・ソトナク	1168~?
3	クワトル・ケツキ	クワトル・ケツキ	1168~1205	クワトル・ケツキ		クワトル・ケツキ	3	15年	クワトル・ケツキ	
4	アカシロ	アカシロ	1205~1219	アカシロ	1163~1167	アカシロ	4	16年	...	
5	シトラル・ウツル	シトラル・ウツル	1219~1234	シトラル・ウツル	1167~1182	シトラル・ウツル	5	2年	...	
6	ウツル	ウツル	1234~1235	ウツル	1182~1184	ウツル	6	...	...	
7	トコツル	トコツル	1235~1239	トコツル	1184~1188	トコツル	7	6年	...	
8	トコツル・エシユロ	トコツル・エシユロ	1239~1278	トコツル・エシユロ	1188~1227	トコツル・エシユロ	8	40年	...	
9	ウツル・ウツル	ウツル・ウツル	1278~1299	ウツル・ウツル	1227~1299	ウツル・ウツル	9	73年	ウツル・ウツル	1299~1299
10	ウツル	ウツル	1299~1363	ウツル	1299~	ウツル	10	...	ウツル	1299~1363
11	ウツル・モツクマ	ウツル・モツクマ	1367~1387	ウツル・モツクマ		ウツル・モツクマ	11	...	ウツル・モツクマ	1367~1387
12	ウツル・ウツル II	ウツル・ウツル II	1387~1415	ウツル・ウツル		ウツル・ウツル	12	...	ウツル・ウツル	1387~1415
13	チヤル・ホホカ	チヤル・ホホカ	1415~1426	チヤル・ホホカ		チヤル・ホホカ	13	...	チヤル・ホホカ	1415~1426
14	ウツル	...		...		...	14	...	...	...
15	モツクマ	ウツル	1427~1440	ウツル		ウツル	15	...	ウツル	1427~1440
16	アヤカトル	アヤカトル	1440~1468	アヤカトル		アヤカトル	16	...	アヤカトル	1440~1468
17	ウツル	アヤカトル	1468~1481	ウツル		ウツル	17	...	ウツル	1468~1481
18	ウツル	ウツル	1481~1486	ウツル		ウツル	18	...	ウツル	1481~1486
19	モツクマ II	ウツル	1486~1502	モツクマ II	(~1116)	モツクマ II	19	...	モツクマ II	1486~1502
20	ウツル	ウツル	1502~1520	ウツル	(1116~38)	ウツル	20	...	ウツル	1502~1520
21	ウツル	ウツル	1520	ウツル		ウツル	21	...	ウツル	1520
22	...	ウツル	1521~1525	ウツル		ウツル	22	...	ウツル	1521~1525
23	モツクマ	(トコツル)	1525	モツクマ		(トコツル)	23	...	モツクマ	1525
24	ウツル	モツクマ	1525~1530	ウツル		モツクマ	24	...	ウツル	1525~1530
25	ウツル	ウツル	1530~1536	ウツル		ウツル	25	...	ウツル	1530~1536
26	モツクマ	ウツル	1536~1541	モツクマ	5年~21年	ウツル	26	...	モツクマ	1536~1541
27	ウツル	ウツル	1541~1554	ウツル		ウツル	27	...	ウツル	1541~1554
28	ウツル	ウツル	1554~1565	ウツル		ウツル	28	...	ウツル	1554~1565
29	ウツル	ウツル	1565~1568	ウツル		ウツル	29	...	ウツル	1565~1568
30	ウツル	ウツル	1568~1573	ウツル		ウツル	30	...	ウツル	1568~1573
31	ウツル	ウツル	1573~1589	ウツル		ウツル	31	...	ウツル	1573~1589
32	ウツル	ウツル	1589~1608	ウツル		ウツル	32	...	ウツル	1589~1608

史的回顾一覽は、史的回顾の最後に掲載されたマヌーカの統治者の一覽(在位年の表記なし)  
 史的回顾・本体は、史的回顾の本文中に登場するマヌーカの統治者(在位年の表記あり)

ナカツルは他書とズレがある箇所  
 クルカケ 創設\*は1227年の項の最後にそれまでの歴代統治者を繰り返った箇所

ウツル・ウツルは補佐

ウツルは1285年情報

ウツルは1573年の60日

上の(iii)で指摘したように、「史的回顧」と『簡潔な報告』とでは、第4代アカシトリから第9代ウィツィルウィトルの就任まで50年前後のずれがある。『第七』は在位年数（最初と最後の年もそれぞれ1年としてカウントしている）だけを示しているが、第9代を別にすれば、他の年数計算とおおむね合っている。「史的回顧」と『簡潔な報告』ではほぼ52年ずつずれているのは、52年を1つの周期とするメソアメリカの暦を西暦に当てはめる時に1サイクル分ずらしたために生じた差である。第4代以降の時期について、『簡潔な報告』は『日記』より1サイクル早いと見なしたため、時間の帳尻合わせが難しくなり、第9代の在位をきわめて長い73年にせざるを得なかった。その点は『第七』も同じである。したがって『簡潔な報告』は『第七』と、「史的回顧」は『メシカヨトル』と近い、あるいは同じ資料を利用していると言える。

「史的回顧」と『メシカヨトル』の近似性を示すもう1つの資料は、メシーカが1325年にテノチティトランを建設した時の指導者集団と、その12年後に一部が分かれトラテロルコの町を作った時の指導者集団に関する資料である。前者については『第三』と『第五』でも取り上げられているので比較してみよう（表6-a）。『メシカヨトル』では2度、そのリストが示されているが、特に2度目のリストと「史的回顧」は順序まで同じである。トラテロルコ集団（表6-b）では食い違いがあるものの、「史的回顧」が挙げる12人は全員が『メシカヨトル』にも出ている。この点では「史的回顧」と『メシカヨトル』の近さが確認できる。



表 6 - a テノチティトラン建設時 (1325) の指導者

	史的回顧	メシカヨトル①	メシカヨトル②	第三	第五
1	テノチ	アトルテノチ (1)	テノチ (1)	テノチ (1)	テノチ (1)
2	シアウトリヨルキ	クワウトリヨルキ (2)	シアウトリヨルキ (2)	アウエショトル (4)	アウエショトル (4)
3	ツオンパンツイン	アカシトリ (10)	ツオンパンツイン (3)	ショミミトル (*)	シウカック (12)
4	アウエショトル	テンサカトル (9)	アウエショトル (4)	オセロパン (*)	オセロパン (*)
5	イスワクトラシキトル	アウエショトル (5)	イスワクトラシキトル(5)	アカシトリ (10)	テンサカトル (9)
6	オコメカツイン	オセロパン (*)	オコメカツイン (6)	テンサカトル (9)	アアトル (8)
7	チコパチマニ	(シウカケ) (12)	チコパチマニ (7)	クワトレコアトル	ショミミトル (*)
8	アアツイン	クワウトレケツキ	アアツイン (8)	クワウトレケツキ	コビル (11)
9	テンサカテトル	(クワウコアトル)	テンサカテトル (9)	コシワトリ (*)	クワウトリヨルキ (2)
10	アカシトリ	ツオンパンツイン (3)	アカシトリ (10)	アショロワ	
11	コビル	イスワクトラシキトル(5)	コビル (11)		
12	シウカケ	オコメカツイン (6)	シウカケ (12)		
13	ショココトル	チコパチマニ (7)	ショココトル (13)		
14	ツイントラトラウキ	アアツイン (8)	ツイントラトラウキ (14)		
		コビル (11)			

メシカヨトル①は p.105   メシカヨトル②は p.111   いずれも Codex Chimalpahin I

(\*) はトラテロルコ指導者と重複もしくは同姓   ( ) 内の数字は左端の順序

( ) 内の人物は「もしくは」として併記されたもの

表 6 - b トラテロルコ建設時 (1337) の指導者

	史的回顧	メシカヨトル
1	クイトラチクワトリ	アトランクワウイトル (7)
2	ショチレレツイン	ウィクトン
3	セマカチキウイトル	オポチトリ
4	ショミミトル	アトラソル
5	カラオミトル	クイトラチクワトリ (1)
6	オセロパネ	ショチレレツイン (2)
7	アトランクウイトル	セマカチキウイトル (3)
8	イシュタクミチン	ショミミトル (4)
9	コシワトリ	カラミトル (5)
10	ボヤウイトル	オセロパン (6)
11	シコヨラツイン	イスタクミチン (8)
12	マルテカツイン	コシワトリ (9)
		ボヤウイトル (10)
		シウココテツイン (11)
		マルテカタウイン (12)

他方、チャルコ関連の記事に注目すると、「史的回顧」で取り上げられているのは、1241年、1269年、1324年、1465年の出来事で、いずれも『第三』がカバーしている。このうち1241年に関する両者のテキストを比べてみると、元のテキストは同一と断定できるほどよく似ている。イタリックの部分で両テキストに共通する部分で、参考のため筆者の訳を付した。

*IX Calli xihuitl, 1241. Nican ypan in ynic acico honcan Chalco Atenco yn huehuetque yn chichimeca yn totollinpaneca yn amaquemeque. Ynin acico yn oncan motlallico Chalco Atenco: yhehuatl yn tlahtohuani yn Huehuetehctli Chichimecateuhctli yhuan ypilhuan omentin: yn icce ytoca Tliltecatzin, yn icode ytoca Atonaltzin, yhuan occequintin huehuetque. Auh ynic ompa hua- llehuaque yn Quinehuayan yn Chicomoztoc ynic tlayahualloque ynic ypan in xihuitl acico ye napohualxiuhtica yhuan onxiuhtica ynic motlallico. (『第三』、p.194~)*

11 の家の年、1241年。この年、チチメカ・トリンパネカ・アマケメカの古老たちはチャルコ・アテンコに到着した。チャルコ・アテンコに住みついたのは以下の人たちであった。君主のウエウエテクトリ・チチメカテウクトリとその2人の息子たちで、最初の子はトリルテカツインで、次男がアトナルツインで、他にも古老がいた。キネワヤン・チコモストクを出立して以来、各地を回り回って、この年に定住するまで82年が過ぎた。

--- *IX Calli xihuitl, 1241 años, yn acico yn oncan Chalco Atenco yn huehuetque chichimeca totolimpaneca yn amaquemeque; yehuatl tlahtohuani hualmochiuhctia yn Huehuetehctli yn Chichimecateuhctli, yhuan acico quinhulhuicac yeyntin ypilhuan: yn icce ytoca Tliltecatzin, yn icode ytoca Xochitzin, yn iquey ytoca Atonaltzin. Auh ynic acico ynic ompa huallehuaque yn Chicomoztoc Quinehuayan ynic tlayahualloque ye nauh pohualxiuhtica ypan onxiuhtica ynic motlallico oncan Chalco Atenco. (「史的回顧」、p.148~)*

…11 の家の年、1241年に、チチメカ・トリンパネカ・アマケメカの古老たちはチャルコ・アテンコに到着した。その君主はウエウエテウクトリ・チチメカテウクトリで、3人の息子を連れていた。トリルテカツイン、ショチツイン、アトナルツインであった。チコモストク・キネワヤンを出立してから、各地を回り回って、チャルコ・アテンコに定住するようになるまで82年が過ぎた。

以上から、「史的回顧」を書く際にチマルパインが参照したと思われる資料は、『第三』、『第七』と『メシカヨトル』、あるいはそれらのもとになった資料だったと言える。

## § 4 - IV. 参照資料の執筆時期

では、それぞれの歴史報告は何年に執筆されたのであろうか。じつは歴史報告各書の執筆年は正確には不明で、文中に「今年、〇〇年」と出てくる最も新しい年をその書が執筆された年としているにすぎない。それによると『第七』は 1629 年、『簡潔な報告』は 1631 年とかなり遅い<sup>(69)</sup>。これらをその執筆年として良いのであろうか。

例えば、『第八』の執筆が 1620 年とされるのは、冒頭の緒言に「今年、1620 年…」<sup>(70)</sup>で始まる一節があるためである。しかし同書は緒言だけがスペイン語で記されており、そこだけが後から書き足された可能性が高い。また、『第六』は 1612 年までの出来事を綴った後、パノワヤン領主クワウセクイツィンの子供たちの話が付け加えられ、「彼（ミゲル・デ・ファビアン）は 1613 年に亡くなった」とあるが、この一文も UNAM 版<sup>(71)</sup>によれば後で書き加えられたものである。さらに、『簡潔な報告』の 1631 年も前後の文章と何の関係もなく挿入された数行に含まれる年号にすぎない<sup>(72)</sup>。

では、『日記』と関わりの深い『第七』はどうか。この書の冒頭近くで、メソアメリカにおける言語の分裂と旧約聖書のバベルの塔との関連性について述べた箇所がある。「今から 335 年前にトラコチカルコの人たちが移動し、トラパラン・ノノワルコを出た（今年 は 1629 年である）。イエス・キリストの誕生から 1272 年経っていた」とある。ところが UNAM 版<sup>(73)</sup>によると、（ ）内は余白への書き込みにすぎない。UNAM 版には訳者が付した注で「1629 年の 335 年前は 1294 年になり計算が合わない」<sup>(74)</sup>とある。しかし、1629 年は後から書き加えた数字であるから、1272 年に 335 年を足した 1607

<sup>(69)</sup> なお、『第三』と『第四』については執筆年を示唆するものはない。このほかの書の執筆年は『第六』が 1612、1613 年 (p.433)、『第八』が 1620 年 (p.271、289、295) とされる。

<sup>(70)</sup> 『第八』、p.271

<sup>(71)</sup> 『第六』 UNAM 版、p.164-165

<sup>(72)</sup> 『簡潔な報告』 p.162 は 1286 年の話の途中 (fol.60v) で話が途切れ、いくつかフオリオが欠落している。fol.61v 冒頭には「…その 1631 年になるまでさらに 14 年経ち、同年、ドン・ディエゴ・ホセ・エルナンデスとその弟ドン・クリストバル・デ・カスタンニェダが亡くなった。…」(拙訳) という前後と脈絡のない一節に続き、1295 年の話が展開される。したがって、1631 年という年号はこの書の執筆年とは何ら関係がないと思われる。

<sup>(73)</sup> 『第七』 UNAM 版、p.19

<sup>(74)</sup> 同ページ、注 32

年を「今から」の基準年と見なすべきであろう。言い換えると、『第七』は1607年ころに執筆されていたと考えられる。前述したように、『日記』の1577年から91年までの記述は『第七』をベースにしており、そうなると『日記』はちょうど『第七』の続編とも思える。なお、『第三』の執筆時期を特定することは現時点では非常に難しい<sup>(75)</sup>。

『メシカヨトル』については、やはり文中にある1609年が執筆年とされてきた<sup>(76)</sup>。また、1983年にロンドンの聖書協会で見つかった『コデックス・チマルパイン』に含まれているスペイン語の要約版には、「今年1621年」という句が2度も出てくる<sup>(77)</sup>。それらが執筆された年を示しているとするれば、チマルパインがそれらの書を1609年までに読み、「史的回顧」に利用することは不可能になる。しかし、最近、注目に値する新たな仮説が提出された。クルエル<sup>(78)</sup>によると、『メシカヨトル』の底本はスペイン語版の『メシカ年代記 *Crónica mexicana*』ではなく、そのナワトル語版であり、それこそが16世紀末にドゥラン<sup>(79)</sup>やフワン・デ・トバル<sup>(80)</sup>が参照したとされる『クロニカ X』<sup>(81)</sup>だという。そして19世紀半ばに出版されて以来よく知られている『メシカ年代記』はナワトル語の原本から誰かがスペイン語に翻訳したものだ<sup>(82)</sup>。この仮説が正しいとすれば、チマルパインもナワトル語の

<sup>(75)</sup> 『第三』はメシカ巡歴に関して『オーバン絵文書 *Códice Aubin*』などいくつかの絵文書を使っている (*Castañeda de la Paz*)。しかしこの絵文書は16世紀後半から1608年にかけて何人かの手で書かれたもので、これらから『第三』の執筆年を特定するのは困難である。

<sup>(76)</sup> *Codex Chimalpahin vol. 1, p.62*

<sup>(77)</sup> 前掲書、p.36, p.38

<sup>(78)</sup> Gabriel Kenrick Kruell, *La Crónica mexicayótl: versiones coloniales de una tradición histórica mexicana tenochca*, ECN 45, 2013, p.197 - 232

<sup>(79)</sup> ディエゴ・ドゥラン (1537~88) は幼い頃、親とともに渡墨し、ドミニコ会修士となり、先住民の宗教を撲滅するため、『神々とその儀礼』、『暦』、『歴史』を執筆 (1570~81) した。

<sup>(80)</sup> フワン・デ・トバル (1543?~1623) はメキシコ生まれのスペイン人で、いくつかの先住民言語で説教をしたという。大聖堂参事会を経てイエズス会に入り、同会のホセ・デ・アコスタが『新大陸自然文化史』を書くための資料を提供し、その際にドゥランの書も大いに利用した。

<sup>(81)</sup> ドゥラン、テソソモク、トバル、アコスタらの著作の内容が似ていることから、それらが参照したであろう共通の資料があると考えたアメリカ合衆国の人類学者ロバート・バーロウによる命名。

<sup>(82)</sup> Kruell 前掲書 p.216 ほか。この底本はテソソモクが序文を寄せた1609年版 (これまで『メシカヨトル』とされてきた版) ではなく古い版で、訳したのはナワトルの言語と文化に通じたスペイン人で、訳した時テソソモクが存命中であったか否かは不

『メシーカ年代記』を読んだ可能性が出てくるため、1609年に書かれた「史的回顧」が『メシカヨトル』（あるいはその底本の『メシーカ年代記』）に影響を受けたとしても矛盾はないことになる。

さて、チマルパインは他の歴史報告では依拠資料を明示し、資料間に食い違いがある場合にはそのことを指摘していることが多い。ところが、『日記』では依拠資料がほとんど示されていない。特に「史的回顧」では皆無である。後の時代になるほど多様な資料が手に入り、1つの出来事に関しても複数の資料を比較検討することができたのに対し、1609年の「史的回顧」で資料を挙げていないのは、まだあまり多くの資料を集められておらず<sup>(83)</sup>、比較ができない段階だったためであろう。

### 結論に代えて

本稿は1608年問題に取り組む糸口として、「史的回顧」の特徴をどのように捉えるかという点に絞って考察した。「史的回顧」の構図は西欧の普遍史の枠組みに則っており、自分たちの祖先が東方から船で渡って来た民族であることを示唆するとともに、離散ユダヤの末裔ではないと断言し、自分たちも救済に値する民族であるという点を何より強調している。このような構図は彼の他の歴史報告と同じであるが、チマルパインはいつ、どのような資料に依拠してそのような構図を描いたのか。

上記の問題の答えを探るには、各書の執筆時期を明らかにしなくてはならないが、現時点では全てを解明するのは困難である。本稿では「史的回顧」が1609年に書かれたことを明らかにした。これは他の歴史報告や参考文献が執筆されたとされる年に比べるとずいぶん早い。また、本稿では『第七』

---

明としている（同、p.222～）。なお、『メシーカ年代記』には2種類の版がある。オリジナルは17世紀半ばにボトゥリーニが所蔵していたが、それをエチェベリア・イ・ベイティアが写した版を『コディセ・ラミレス』と合本したオロスコ・イ・ベラの版が20世紀末まで唯一利用可能な版であった。20世紀半ばに発見されたオリジナル版は現在ワシントンのアメリカ議会図書館（ハンス・クラウス蔵書）が所蔵しており、それを底本とした版が1997年に出された。

<sup>(83)</sup> 表2を見て分かるように、チマルパインがサンアントニオ・アパー教会に入った1593年ごろから次第に記述の分量が増えているが、1601年5月6日から翌年4月25日まで約1年の、1602年も10月26日から翌03年4月20日まで半年の空白期間がある。それが何を意味するのかは類推するしかないが、半年から1年にわたり里帰りをし、その間に『第八』で取り上げているようなチャルコ地方の資料探しに奔走し、写本をとったのかもしれない。

が1629年ではなく、1607年には書かれていた可能性を指摘し、『メシカヨトル』の原本が1581年までに著されていたとする新説を紹介した。したがって「史的回顧」を書く際、チマルパインは少なくとも『メシカヨトル』と『第七』を参照できる状況にいたことは間違いないであろう。

『日記』の少なくとも前半は『第七』の続編のような同時代史であるが、「史的回顧」は天地創造から1609年当時までの簡略年表のようなものと言えよう。いわば、それまでの歴史の総括である。ではなぜその時点で総括が必要だったのか。それは今の時点では推測するしかないが、彼の中で何かが変わったからに違いない。その変化は1608年以降の『日記』そのものに現われているが、本稿でそこまで言及することは紙幅の関係でできなかった。稿を改めて述べることにしたい。

## 参考文献

## 一次資料

- Chimalpáhin, Domingo, *Las ocho relaciones y el Memorial de Colhuacan*, paleografía y traducción por Rafael Tena, México, 2 vols., 1998
- *Diario*, paleografía y traducción por Rafael Tena, México, 2001
- Chimalpain Cuauhtlehuanitzin, *Octava Relación*, edición y versión castellana de José Rubén Romero Galván, UNAM, México, 1983
- *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*, ed. de Víctor M. Castillo. F., UNAM, México, 1991
- *Primer Amoxtli Libro, 3ª Relación de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Víctor M. Castillo. F., UNAM, México, 1997
- *Primera, Segunda, Cuarta, Quinta y Sexta Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, Silvia Lemón, Miguel Pastrana y Víctor M. Castillo F., UNAM, México, 2003
- *Séptima Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, UNAM, México, 2003
- *Chimalpáhin y la conquista de México [La crónica de Francisco López de Gómara comentada por el historiador nahua]*, ed. Susan Schroeder, David Tavárez Bermúdez, Cristián Roa-de-La-Carrera, UNAM, México, 2012
- Chimalpahin Quauhtlehuanitzin, don Domingo de San Antón Muñón,
- *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder, and Doris Namala, Stanford University Press, 2006
- *Codex Chimalpahin : Society and Politics in Mexico Tenochtitlan, Tlatelolco, Texcoco, Culhuacan, and Other Nahua Altepetl in Central Mexico*, 2 vols., Ed. And trans. By Arthur J. O. Anderson and Susan Schroeder, U. of Oklahoma Press, 1997
- Boturini Benaduci, Lorenzo, *Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional*, México, 1974 (1746)
- Clavijero, Francisco Javier, *Historia antigua de México*, México, 1974 (1780)
- Del Castillo, Cristóbal, *Historia de la venida de los mexicanos y otros*

- pueblos e Historia de la conquista*, traducción y estudio introductorio por Federico Navarrete Linares, México, 1991 (1600?)
- Durán, Fr. Diego *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*, 2 vols., México, 1995 (1581)
- Martínez, Henrico, *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*, México, 1991 (1606)
- Mendieta, Fr. Gerónimo de, *Historia eclesiástica indiana*, México, 1971 (1596)
- Torquemada, Fr. Juan de, *Monarquía indiana*, 3 vols., México, 1975 (1615)
- Tezozomoc, Hernando de Alvarado, *Crónica mexicana*, ed. de Gonzalo Díaz Migoyo y Germán Vázquez Chamorro, Madrid, 2000 ( ...? )
- Vetancurt, Fr. Agustín de, *Teatro mexicano, Crónica de la Provincia del Santo Evangelio de México, Menologio franciscano*, México, 1971 (1698)
- アコスタ、ホセ・デ (増田義郎訳) 『新大陸自然文化史 上・下』 (岩波書店) 1966 (1590) 年
- サアグン、ベルナルディーノ・デ・(篠原愛人・染田秀藤訳) 『神々とのたたかい I』 (岩波書店) 1992 (1577) 年
- ..... (小池佑二訳) 「メシコの戦争」(『征服者と新世界』所収) (岩波書店) 1980 (1577) 年
- ドゥラン、ディエゴ (青木康征訳) 『神々とのたたかい II』 (岩波書店) 1995 (1570、1579) 年
- ボド、G/T・トドロフ (菊池良夫・大谷尚文訳) 『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』 (法政大学出版局) 1994 年
- モトリニア、トリピオ・デ・ベナベンテ (小林一宏訳) 『ヌエバ・エスパーニャ布教史』 (岩波書店) 1979 (1540) 年

二次資料：ECNは Estudios de Cultura Náhuatl (UNAM)

Castañeda de la Paz, María “El Códice X o los anales del “Grupo de la Tira de la Peregrinación” ; copias, duplicaciones y su uso por parte de los cronistas”, *Tlalocan* 15 (2008), p.183-214, México

Castillo F., Víctor M., Estudio Preliminar al *Memorial breve acerca de la*



- fundación de la ciudad de Culhuacán*, México, 1991
- Lundberg, Magnus “El clero indígena en Hispanoamérica : De la legislación a la implantación y práctica eclesiástica”, *ECN* 38 (2008), p.39-62, México
- Jalpa Flores, Tomás, *La sociedad indígena en la región de Chalco durante los siglos XVI y XVII*, México, 2009
- Kruell, Gabriel Kenrick, “La Crónica mexicayotl: versiones coloniales de una tradición histórica mexicana tenochca”, *ECN* 45 (2013) , p.197-232, México
- León-Portilla, Miguel, Un testimonio de Sahagún aprovechado por Chimalpahin --- Los olmecas en Chalco-Amaquemecan --- *Obras de Miguel León-Portilla*, t.VII, p.273-307, 2010
- ..... Estudio preliminar de *Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional*, México, 1974
- Messiaen, S.A.D. “Some interesting observations on Chimalpahin by us of his Difetentes Historias Originales”, *ECN* 34 (2003), p.219□256
- Morales Valerio, Francisco, *Antecedentes sociales de los franciscanos en México. Siglo XVII*, The Catholic University of America, Washington, D.C., 1971
- Romero Galván, José Rubén, Introducción y PRIMERA PARTE de Chimalpain, *Octava Relación*, México, 1983
- Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, en *Historiografía mexicana I*, México, 2003
- Ruhnau, Elke “The First Relation of Chimalpahin’s *Difetentes Historias Originales*. Its sources and the author’s intention”, *Indiana*, 19/20, pp.277-287, 2002/2003, <http://www.iai.spk-berlin.de> (accessed on 21, April, 2014)
- Schroeder, Susan, *Chimalpahin & the Kingdoms of Chalco*, University of Arizona Press, 1991
- ..... “Chimalpahin Rewrites the Conquest : Yet Another Epic History ?” in *The Conquest All Over Again*, ed. Susan Schroeder, Sussex Academic Press, 2010
- ..... Introduction to the Codex Chimalpahin v.2, U. of Oklahoma,

1997

..... The Annals of Chimalpahin, in *Sources and Methods for the Study of Postconquest Mesoamerican Ethnohistory* (provisional version), ed. James Lockhart, Lisa Sousa, and Stephanie Wood, 2007, U. of Oregon, <http://whp.uoregon.edu/lockhart> (accessed on 21, April, 2014)

Schwaller, John Frederick *The Church and Clergy in Sixteenth-Century Mexico*, Albuquerque, U. of New Mexico, 1987

Serra Puche, Mari Carmen y Ma. Teresa Castillo Mangas, “La vida cotidiana en una chinampa xocimilca”, en *Azteca y mexicana : las culturas del México antiguo*, Madrid, 1992

Tena, Rafael Presentación de *Diario de Domingo Chimalpáhin*, México, 2001

Zimmermann, Günter “Chimalpahin y la iglesia de San Antón Abad en México”, *Traducciones Mesoamericanas*, t. 1(1966), p.11-26, Sociedad Mexicana de Antropología

井上幸孝 「チマルパインの『日記』」 『神戸市外国語大学研究科論集』 第六号 p.53-71、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科、2003

..... 「クリオーリョという観点から見た先住民記録者アルバ・イシュトリルシヨチトル」 『紀要』10号 p.27-41、京都ラテンアメリカ研究所 京都外国語大学 2010

岡崎勝世 『聖書 vs.世界史 キリスト教的歴史観とは何か』 講談社現代新書、1996

酒井真梨奈 「『コディセ=チマルパイン』第3巻巻頭文書に関する一考察」 撰南大学国際言語文化研究科 修士論文、2015

篠原愛人 「アステカの絵文書 忘却の深淵から」 『ユリイカ』 1991年8月 p.168-177

染田秀藤・篠原愛人監修 『ラテンアメリカの歴史 史料から読み解く植民地時代』 世界思想社 2005

ロペス=アウスティン、アルフレド（曾根尚子訳） 「海を越えてきたメシカ人の歴史物語」 『季刊 iichico』22、1992

(Summary)

### Chimalpahin and 1608

In 1608 Chimalpahin wrote a short history of the mexicas in the form of “chronological chart” in his so called “Diary”. He inserts this chart “suddenly” when he finished writing an article on 15th, October. Why he did so and why on that occasion ? What was his purpose in doing so ?

To answer these questions, we tried to characterize this chart, which has the same structure with his other “Relaciones historicas”. He emphasizes that the ancestors of the mexicas came by ship from the East and that they are not the descendants of the lost Jewish tribes. The chronological chart was written in 1609 according to our estimation and we suppose that his main sources to write this chart were his 3rd and the 7th Relaciones and “Cronica mexicayotl” of Tezozomoc. These have been said to be written in 1620s or later, but we demonstrate that Chimalpahin was able to use these or other similar materials.